

# 万吉だより

MA GECHI NEWS

第13号 平成22(2010)年12月

## 群集墳の時代

館長 池上 悟

平成23年度の立正大学博物館特別展として、群集墳を採り上げました。群集墳とは群集する古墳の意味ですが、研究者個々により厳密な定義は異なっております。横穴式石室を埋葬施設として墳丘内部に構築した小規模古墳の密集する状態を表す用語として、一般的に使用されております。

熊谷地区を含む埼玉県北部地域においては群集墳の発達著しく、重要な地域的特徴を示しています。古墳は一般的な農民層が構築したのではなく、地域の支配階層に属する集団が造営したものであり、最有力者の古墳を地域の首長墓と呼んでおります。群集墳は首長墓と関連して展開しており、地域社会の実態を反映するものと理解されます。

高塚古墳の埋葬施設として横穴式石室が埼玉県北部地域に普及するのは6世紀後半代であり、加工し易い凝灰岩ないしは河原石を石材として使用しています。横穴式石室は関東地方では北部地域に早く6世紀代前半に導入され、南部地域では6世紀代後半に出現します。埼玉県に著名な吉見百穴横穴墓群は、崖面に横穴式石室の構造を模倣した墓室を穿った埋葬用の施設で、群集して造営されています。古墳時代後半期に群集して営まれた埋葬施設として群集墳の一類型であると考えられますが、一般的には古墳の表徴である墳丘を伴わないので一応区別されています。しかし、高塚群集墳と横穴墓群は同時期に平行して地域首長墓の管掌下に造営されており、総合的検討が望まれている現状です。

立正大学考古学研究室は、熊谷校地開設に伴って、昭和39年に“踊る埴輪”の出土で著名な江南町の野原古墳群を発掘調査しました。江南台地の南側を限る和田川に面する台地縁辺に展開した30基近い古墳群のうちの8基の古墳を調査し、破壊が著しかったものの、いずれの古墳も横穴式石室を構築したものであったと考えられました。

発掘調査された古墳を資料として古墳群の構成を復元すると、4～5基の古墳が小単位として存在し、これがまとまって全体としての古墳群を形成していることが考えられた。小単位としての古墳のまとまりは、直接的に古墳を築造した家族（古墳造営主体）の累代的な形成の結果と考えることができ、2～3世代、造営期間としては6世紀末頃から7世紀中葉に至る50～60年の年代幅が想定されます。野原古墳群は、この時期に当該地区の開発を主導した有力集団の墓域として造営されたものと考えられます。

群集墳の重要な副葬品の一つとして、鉄製武器が指摘されます。群集墳が武装した集団の墳墓とされる所以ではありますが、決して均一的に出土している訳ではありません。刀身が真直ぐな直刀、先端の尖った鉄鏃などが主な武器ですが、群集墳ごとに内容を異にしています。群集墳の個性を物語る重要な資料となっています。

## 第 7 回企画展 古代・中世の武蔵国の骨蔵器

平成 22 年 7 月 1 日(木)～31 日(土)にかけて、第 7 回企画展「古代・中世の武蔵国の骨蔵器」を開催しました。

立正大学博物館の第 1 展示室の常設展示に古代の骨蔵器 3 点と中世の骨蔵器 1 点が展示されています。これらの骨蔵器は、立正大学文学部考古学研究室による発掘調査で発見されたものや、寄贈されたものです。今回の企画展では、この骨蔵器にスポットをあて、古代・中世の武蔵国(現埼玉県・東京都・神奈川県の一部)における骨蔵器の普及について見てみました。

日本における火葬の始まりは、文武天皇 4 年(西暦 700 年)に僧道照が火葬されたことが最初と伝えられています。これは仏教的な、火で遺体の処理を行い荼毘に付すという意味であり、単に遺体を火で処理する行為自体は縄文時代晩期から確認されています。

道照の火葬以降、天皇や官人層、高僧などは火葬を取り入れるようになりました。

火葬された遺体は、骨蔵器(蔵骨器・骨壺など)と呼ばれる容器に入れられ埋葬されました。材質は、金銅・瑠璃・土・石・木製品などで、形は壺形・甕形・櫃形・棺形・特殊形(獣脚付短頸壺など)がありますが、多くの骨蔵器は日常什器(壺や甕など)を転用して使用しています。

火葬が広まり始めた頃の関東各地における奈良時代の火葬墓は、基本的には当時の官衙と関連する地区に分布しています。

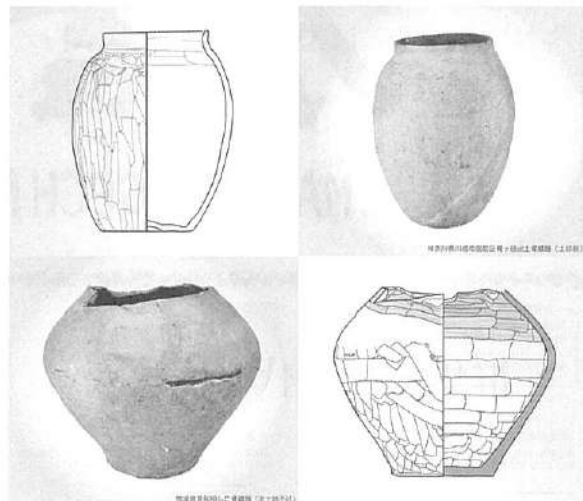
火葬墓は、葬られた人物の階層の違いにより埋葬施設・骨蔵器などの様相を異にしています。日常什器転用品ではない特別な骨蔵器などは、地方における相当な立場の人物を被葬者に想定することが出来ます。

立正大学博物館所蔵の骨蔵器は 4 点あり、内 3 点は古代の骨蔵器で、神奈川県川崎市より出土し

立正大学博物館 第 7 回企画展

## 古代・中世の武蔵国の骨蔵器

平成 22 年 7 月 1 日(木)～7 月 31 日(土)



講演会

「武蔵国における古代・中世の壺と骨蔵器」

講師 渡辺一氏(大東文化大学非常勤講師)

日時:平成22年7月24日(土)

13時～14時30分

場所: 船谷市中央公民館

交通案内: 裏面地図を参照下さい。

開催時間: 10時～16時 入館料: 無料

休館日: 火・日・祝日、大学休館日

場 所: 立正大学博物館 1F

お問い合わせ

Fax: 048-536-6194 埼玉県船谷市万吉 1700

TEL: 048-536-6150 / Fax: 048-536-6170

Email: museum@ris.ac.jp

URL: <http://www.ris.ac.jp/museum/>

協力 船谷市中央公民館

### 第 7 回企画展チラシ

たものです。残る 1 点は中世の骨蔵器で、千葉県八日市場市にある塚原古墳群の古墳の墳丘から出土したものです。

古代の骨蔵器 3 点のうち、2 点は川崎市宮前区有馬から出土したものです。1 点はいわゆる武蔵甕といわれる古代の土師器甕を転用したものです(写真 1)。もう 1 点は長胴で全体的に丸く膨らんだ土師器甕を転用したものです(写真 2)。その他の 1 点は同じく宮前区の梶ヶ谷から出土したものです。これは一般的な土師器甕を転用したのではなく、おそらく骨蔵器のために造られたと考えられるものです(写真 3)。

また、中世の骨蔵器は、常滑焼の甕を転用したものです。頸部のところで意図的に打ち欠いています(写真 4)。

その他に古代の骨蔵器の例として、埼玉県川口市の吠原遺跡、埼玉県深谷市の宮林遺跡、埼玉県東松山市の児沢北遺跡を紹介しました。古代の骨蔵器の分布状況を見ると、現在の埼玉県川口市付近と神奈川県川崎市付近に非常に多く集中してい

ることがわかります。また、骨蔵器を埋める時に口の部分を上の状態にした正位の状態と、口の部分を下にした逆位の状態にして埋める場合があります。多くは正位の状態で埋められていますが、逆位にして埋められている例も多く見られ、古代の骨蔵器の特徴的な例として挙げられます。

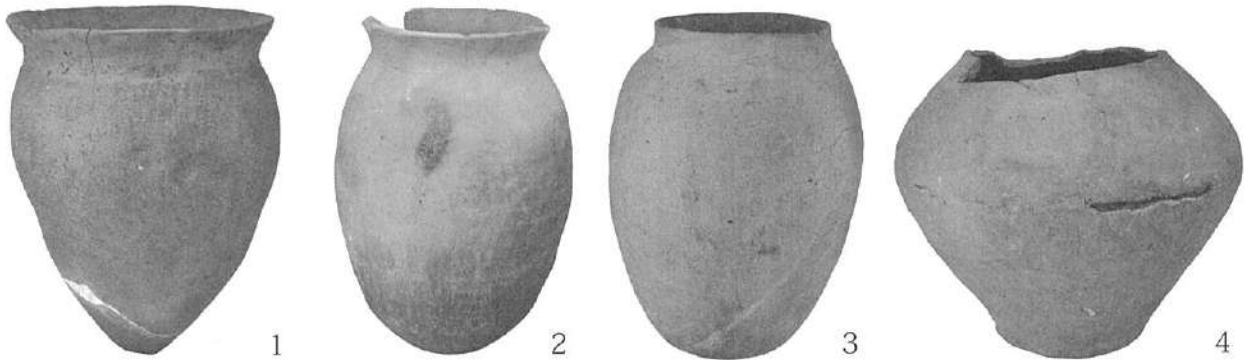
また、中世の骨蔵器のその他の事例として、埼玉県行田市の築道下遺跡、埼玉県上尾市の西通Ⅰ遺跡、埼玉県熊谷市の合羽山遺跡、栃木県足利市の宿居館跡を紹介しました。

中世の骨蔵器には、在地産の陶器が使われますが、常滑焼や渥美焼、古瀬戸・中国産陶磁器なども使用されるようになります。また、火葬墓も武士団の台頭、鎌倉仏教の展開とともに変容していきました。古代の火葬墓においては明確な墓域などはありませんでしたが、中世になると石塔の造

立などに伴ない、方形に区画される墓域が明確に現れます。そして、古代では2種類の埋納方法が見られましたが、中世においてはほぼ正位の状態で埋納されています。

企画展の関連事業として7月24日(土)に「武蔵国における古代・中世の墓と骨蔵器」と題して渡辺一氏(大東文化大学非常勤講師)に記念講演会を行っていただきました。今回の記念講演会は熊谷市中央公民館の協力を得て、学外での講演会を行いました。

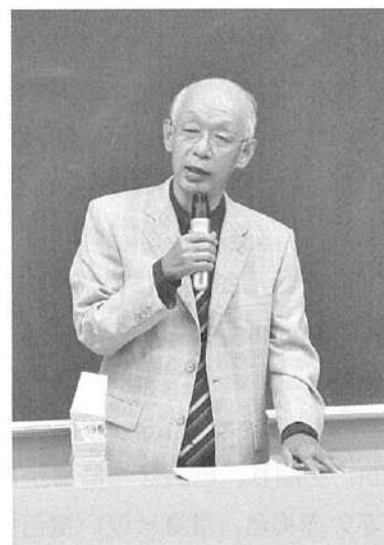
また、大崎キャンパスの移動展示(パネルによる企画展の紹介)を9月18日(土)～10月16日(土)に行いました。あわせて記念講演会を10月2日(土)に「南武蔵における古代火葬墓の展開」と題して村田文夫氏(昭和39年度立正大学卒業生)に講演していただきました。



立正大学博物館所蔵骨蔵器(縮率不同)



渡辺一氏の講演



村田文夫氏の講演

## 収蔵資料紹介

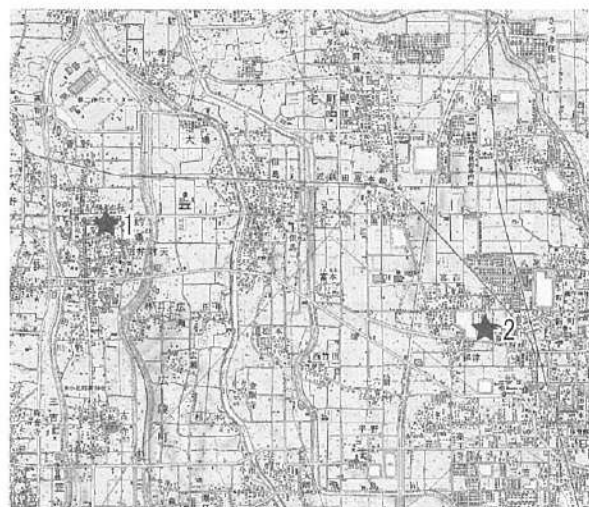
立正大学博物館の収蔵資料に泥塔 5 点があります。泥塔とは、泥土を型抜きにして成形し、塔形に固めたもので、土塔とも呼ばれます。底部に小さい孔を穿られる例もあり、孔には経文や偈文印した紙片が納められます。形態は円塔形、段塔形、五輪塔形、宝篋印塔形、宝塔形、層塔形、相輪形などがあります。奈良時代ごろから現れ、息災・追善供養など現世利益のために造塔供養などの信仰からこのような泥塔が造られました。

立正大学博物館所蔵の泥塔 5 点は、4 点が奈良県北葛城郡広陵町の東大福寺遺跡で採集されたもので、残り 1 点は出土地不明です。これらは、矢追隆家氏により寄贈されたもので、『銅鐸』創刊号（立正大学考古学会昭和 7 年 5 月刊）で報告されています。しかしながら、詳細な図面や写真が掲載されておらず、今回改めて資料の紹介を行いたいと思います。

### 東大福寺遺跡採集泥塔

1 の大きさは、高さ 6.2cm、最大幅 5.6cm、塔身幅 4.4cm を測り、色調はにぶい黄橙色で、宝塔形を呈します。基礎部と笠部は方形で、基礎部高さ 9.0mm ～ 14.0mm、笠部高さ 13.0mm で表現されています。笠部の上には径 1.9mm の相輪部の基部が 5mm ほど残存しています。成形は両側から合わせて作られており、5 点ともに同一です。また底部には最大径 7mm、深さ 2.8cm の小孔が穿られています。塔身の両面には梵字が表出され、阿弥陀梵字種子・キリーク（𑖀𑖃𑖫𑖞）と釋迦梵字種子・バク（𑖀𑖃𑖫𑖞）が見られます。また、種子バクのすぐ下、基礎部分に横幅 1.6cm、縦幅 1.3cm、厚さ 2.0mm の長方形の突出部分が表出されています。

2 の大きさは、高さ 7.7cm、最大幅 4.2cm、塔身幅 3.1cm、を測り、色調は相輪部から笠部にかけてにぶい赤褐色、塔身は淡い橙色で、宝塔形を呈しています。基礎部高さ 6.0 ～ 8.0mm、



東大福寺遺跡位置図（1. 東大福寺遺跡、2. 宮古）

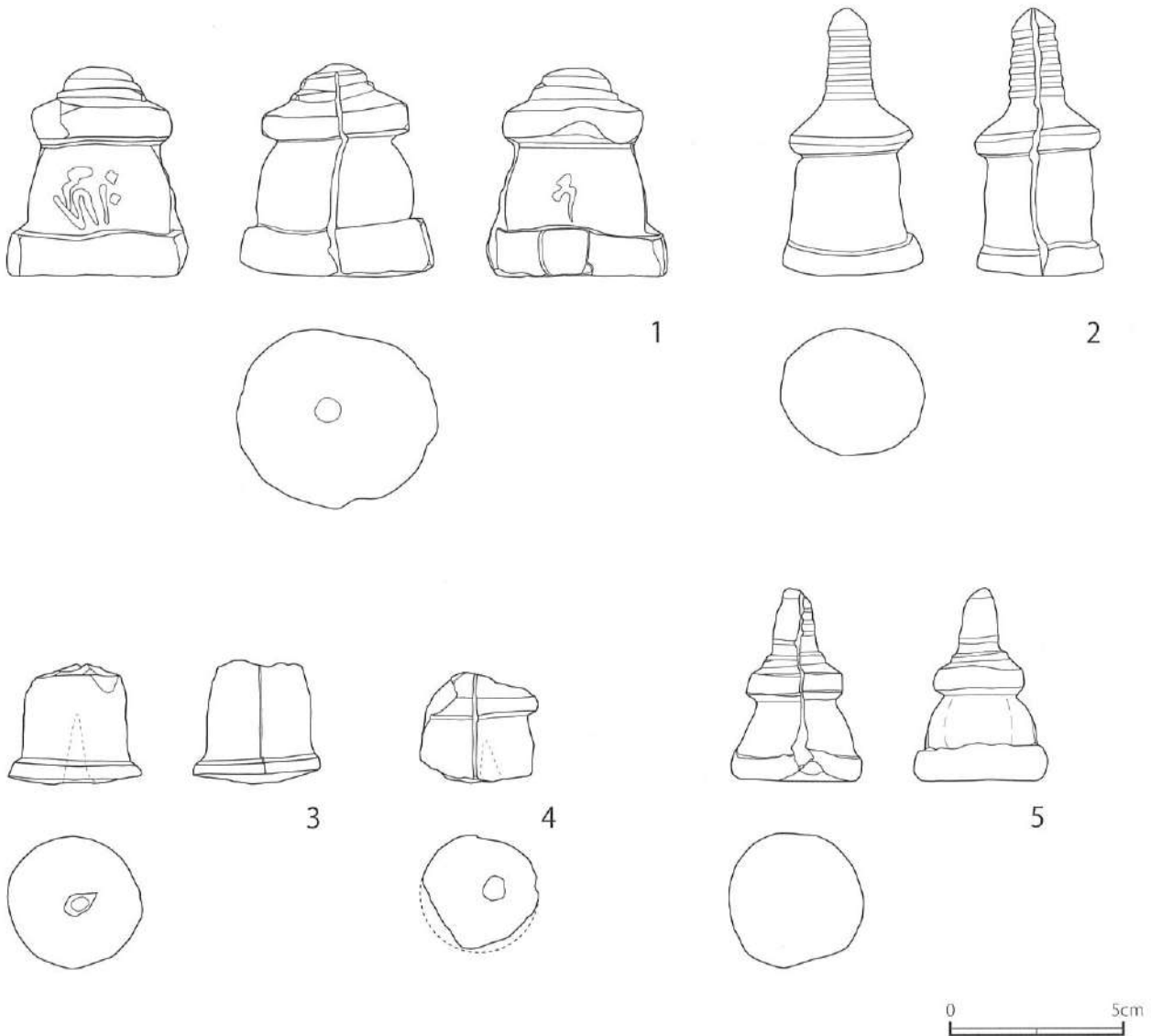
笠部高さ 15.0mm、最大径 36.0mm を測ります。笠部の上部には、相輪部が高さ 26.0mm、径 15.0mm で、5 条の突帯で九輪が表出されています。底部穿孔や梵字表現などは認められません。

3 の大きさは、残存高 3.5cm、最大径 3.9cm、塔身幅 3.0cm を測り、色調はにぶい赤褐色で、塔身より上部は欠損しているものの円塔形を呈します。基礎部は高さ 3.0 ～ 4.0mm ほどで 1・2 のものより薄く表現されています。底部には径 9.0mm、深さ 20.0mm の小孔が穿られています。塔身部には梵字などは表されていません。

4 の大きさは、残存高 3.2cm、最大幅 3.4cm、塔身最大幅 3.2cm を測り、色調はにぶい褐色を呈します。残存部分は塔身部 3 分の 1 と笠部 4 分の 1 が残るのみです。底部に穿られた小孔の残存部分が径 6.0mm、深さ 11.0mm の大きさで見られます。

### 出土地不明泥塔

5 の泥塔は「出所不明」と底部に墨書で注記がされています。大きさは、最大高 5.5cm、最大幅 3.9cm、塔身部最大幅 3.2cm を測り、色調はにぶい黄橙色で、宝塔形を呈します。基礎部高さは 9.0mm、笠部高さは 10.0mm を測ります。塔身部は基礎部と接する下部を最大径とする円形を呈し、上部笠部との接する部分で最小径 2.2cm を測ります。笠部上部には高さ 1.8cm、笠部と接



泥塔実測図

する下部で径 1.1cm、幅 1.0mm ほどの 4 条の突帯で相輪を表出しています。塔身部には梵字は見られません。

以上の 5 点の泥塔は、1・4・5 と 2・3 の 2 種類に分類できます。1・4・5 は塔身部分が扁平な円形の形態をとるもので、2・3 は塔身部が円筒形の形態になるものです。底部に小孔を穿つものは種類による違いはありません。

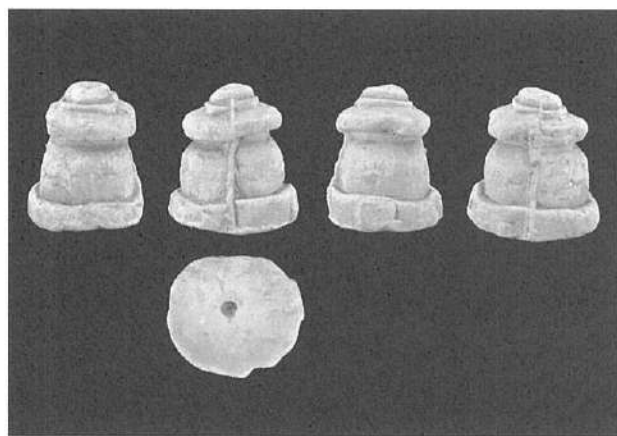
宝塔型の泥塔は、全国で 25 箇所以上の出土例が知られており、特に宮城県多賀城廃寺からは 2,683 個もの泥塔が確認されています。その他に山梨県権現堂遺跡、熊本県つづの山遺跡などの遺跡から大量の宝塔型の泥塔が確認されています。

これらの泥塔は、同じ宝塔型ではありますが、今回紹介した東大福寺遺跡のような種類とは違い、塔身部と笠部の間に 1 段の首部を表現するものです。このように宝塔型の泥塔でも様々な表現の違いを見ることができます。

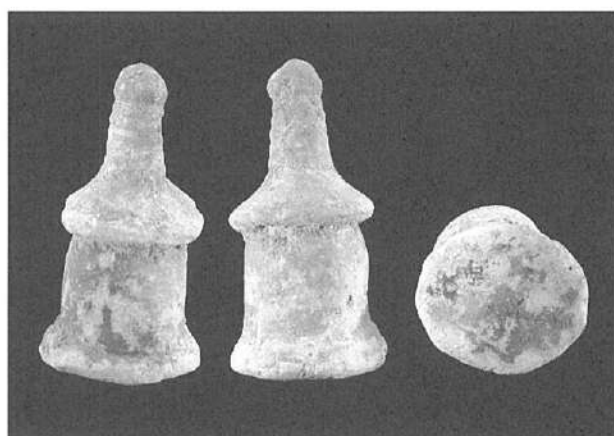
奈良県においては、今回の報告した東大福寺遺跡のほかに、同遺跡から東へ約 3km 行った磯城郡田原本町宮古付近でも多量の泥塔の出土が確認されています。

これらの泥塔は奈良時代頃の所産と考えられています。ここに紹介した泥塔と類似する資料は全国各地に所蔵されており、奈良県のこの遺跡から多量に出土したのと考えられます。





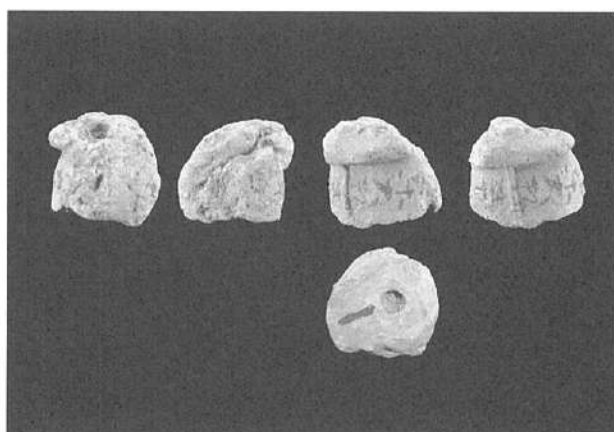
1



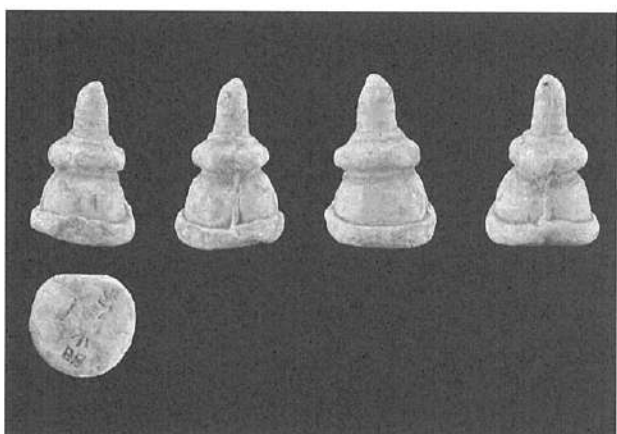
2



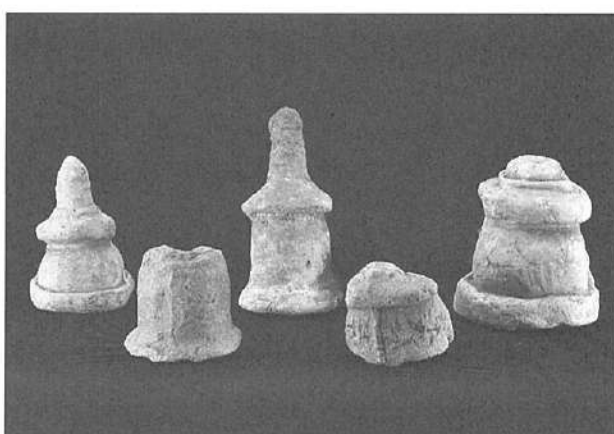
3



4



5



立正大学博物館所蔵 泥塔

泥塔写真

## NEWS

## 入館者数

平成22年4月1日から12月25日までの入館者数は1,956名です。

4月(21日間)…326名、5月(20日間)…233名、  
6月(22日間)…150名、7月(23日間)…305名、  
8月(1日間)…108名、9月(7日間)…150名、  
10月(22日間)…239名、11月(18日間)…127名、  
12月(18日間)…318名

## 館務実習

平成22年度の館務実習を以下の全7日間の日程で行いました。

実習生；8名（文学部史学科6名、地球環境科学部環境システム学科2名）

## ▼7月7日(水)

野外実習事前講義

池上悟館長による野外資料収集実習の事前講義

## ▼7月11日(日)、18日(日)、19日(月)

野外資料収集実習(熊谷市小島2770 医王寺にて)  
3回のうち1回の出席。

## ▼8月30日(月)～9月3日(金)

館務実習

## 出版物

平成22年度上半期は、下記の出版物を刊行しました。

- ・『立正大学博物館年報』第9号
- ・第7回企画展図録『古代・中世の武蔵国の骨蔵器』

## ・8月30日(月)

- ・午前；文化史講義

(埼玉県立歴史と民俗の博物館 井上尚明氏)

- ・午後；刀の取扱

(文学部社会学科 田嶋和久先生)

## ・8月31日(火)

- 資料の取扱(写真撮影)

## ・9月1日(水)

- 資料の取扱(資料台帳作成)

## ・9月2日(木)

- 資料の取扱(梱包実習)

## ・9月3日(金)

- 自然史講義(地球環境科学部 島津弘先生)



野外実習調査風景

## 見学者の声

当館では、来館者の皆様の皆様の意見を反映する為メッセージ箱を備えております。下記のご意見は寄せられたご意見から事務局で集約したものです。貴重なご意見ありがとうございました。今後の博物館運営に役立たせて頂きたいと思っております。

・骨蔵器がこんなにも古いときからあるとは知りませんでした。

(県内・本学学生)

・展示資料が非常にたくさんあり驚きました。自然系の資料もあると良かったです。

(県内・本学学生)

・骨蔵器の企画展を見に来ました。対象遺跡が少なくて残念でした。

(県内・一般・40代男性)

・縄文土器のコレクションが見れて良かったです。他にも様々な資料があり楽しく見れました。

(県内・一般・50代女性)

・骨蔵器にも装飾された陶器などが使われていてお洒落だなと思いました。

(県内・一般・60代女性)

・各国の鐘がいろいろあって面白かったです。復元された鐘の音色が非常に良かったです。

(県内・一般・60代男性)

## 利用案内

所在地：〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉 1700  
立正大学熊谷キャンパス内  
TEL 048-536-6150  
FAX 048-536-6170

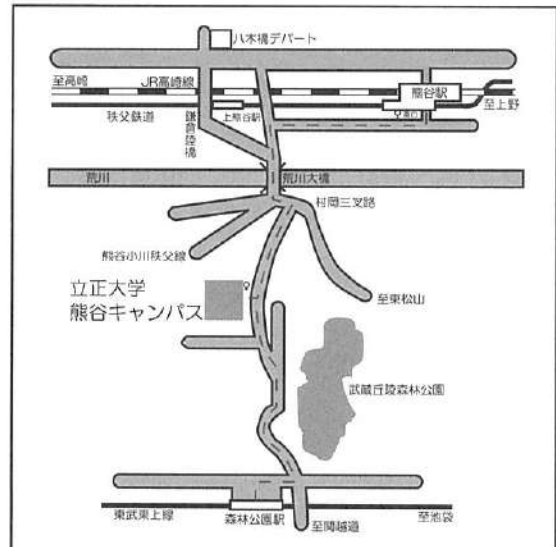
開館日：月・水・木・金・土曜日（大学休業中を除く）

開館時間： 10:00～16:00

※休館日（火・日・祝日）及び大学休業中（夏・冬・春期休暇等）に見学を希望する方は、事前に博物館あるいは総務部総務課（048-536-6010）にご連絡下さい。

交通機関：① JR 高崎線、上越・長野線幹線、秩父鉄道「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス（国際十王交通）で約 10 分。

②東武東上線「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス（国際十王交通）で約 12 分。



## あとがき

今年度の企画展は、骨蔵器について展示しました。今回の企画展記念講演会では、新しい試みとして熊谷市中央公民館で開催しました。博物館がキャンパス内にあり、一般の方がなかなか足を運びづらいこともあり、熊谷市中央公民館の協力を得て開催しました。今後も上手く連携して地域の博物館としても役割を果たせるようにしていきたいと思っております。

(内田)

立正大学博物館館報 万吉だより 第 13 号

平成 22 (2010) 年 12 月 20 日発行

編集・発行 立正大学博物館

〒360-0194 埼玉県熊谷市万吉 1700

TEL 048-536-6150

FAX 048-536-6170

E-mail : museum@ris.ac.jp

URL : <http://www.ris.ac.jp/museum/index>

題字揮毫 田淵観斎(立正大学名誉教授)

(印刷：光写真印刷株式会社)